

# ら は た 訪 探 史 歴 クラブ 其の66

TAHARA  
History Inquiry  
Club

渥美半島から消えた  
動物たち

渥美半島の貝塚では、生息環境の  
違いもあり、それぞれ占められてい  
る貝の種類が異なっています。

伊川津貝塚の貝は、多い順に、ス  
ガイ・アサリ・オニアサリ・ハマグリ・  
マガキで占められています。これら  
の貝は、内湾の砂泥、砂礫底種に分  
類されます。一方、吉胡貝塚では、  
マガキ・ハマグリ・アサリ・オオノ  
ガイ・スガイ・アカニシ・ダンベキ  
サゴと続き、内湾砂泥底種で占めら  
れています。わかりやすくいえば、

吉胡貝塚では泥っぽい場所、伊川津  
では砂礫（小石まじりの砂）っぽい  
場所の貝が多いということです。い  
ずれも外洋のものも含まれているの  
が特徴です。

「渥美半島ではもう見られない貝」  
イタボカキ

イタボカキはマガキと異なり、海  
面下の岩礁地帯に生息します。殻長  
10cm以上にもなり、貝輪の素材とし  
ても使われます。当時の人々は潜水  
して採探したと考えられますが、現  
在、愛知県ではほぼ絶滅しています。

ハマグリ

ハマグリは吉胡貝塚でも一番多く  
食べられていました。殻長は約10cm、  
皆さんもご存じのとおり非常に美味



愛知県では現在、ほぼ見られなくなった貝(吉胡貝塚)  
左からハマグリ、ハイガイ、イタボカキ

で、現在、国産のものは高嶺の花と  
なっています。愛知県でもほとんど  
採ることができません。

汐川流域の貝塚をみると、縄  
文時代（吉胡貝塚）は、ハマグリ  
が多くを占めています。古代の貝塚  
でもハマグリは多くを占めています  
が、アサリの率が高くなってきます。

そして、中世になるとハマグリは減  
少、江戸時代の貝塚では、アサリ・  
サルボウがほぼ主体となります。こ  
れは、江戸時代から始まった干潟の  
干拓によって、貝類の生息環境が悪  
化したためと考えられます。ちなみ  
に、1960年代には福江湾でもハ  
マグリが採れたという文献がありま  
すが、渥美半島からハマグリがいつ  
消えたかはよく分かりません。

ハイガイ

サルボウとよく間違われるハイガ  
イは、泥海底に生息し、サルボウに  
比べて肋が粗いのが特徴です。殻長  
は5cmほどになるのが普通ですが、  
渥美半島で出土するものは4cmほど  
のものです。近年まで汐川干潟に生  
息していたといわれ、吉胡貝塚から  
も少なからず見つかっています。し  
かし、日本では現在、ほぼ絶滅に近  
い状態です。

このほか、汐川干潟に生息するオ

オノガイ（県準絶滅種）、オキシジ  
ミも絶滅が心配されます。



かつて、海に恵みをもたらした干潟(折立町)

これら一例をあげた動物たちが  
「いつまで生息したのか」という記  
録は意外と少なく、今後、それらの  
記録を整理する必要があります。

また、これら紹介してきた動物た  
ちは比較的遺跡で見つかりやすく、  
記録に残りやすいものです。そう考  
えると、いったいどれだけの生き物  
がこの100年で姿を消していった  
かわかりません。かつて渥美半島で  
普通に生息していた動物たちがいな  
くなった理由を、わたしたちは今一  
度受け止めなければならぬでしょ  
う。(増山)

文化財課 23局3531